
狂夜余話 - 人形師 源十郎 -

”太った猫”

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂夜余話 - 人形師 源十郎 -

【NZコード】

N9302B

【作者名】

”太つた猫”

【あらすじ】

生き人形神無と人形師源十郎のドタバタラブコメ?今回のゲストキャラは吸血鬼シェリル・アーシア

凶弾^{それ}は、感覚の外から来た。弾着音^{あと}が後から響く、迂闊^{といえは}といえは迂闊、夜の彼女達^{やりかた}の超感覚すら及ばぬ長距離^{ロング・レンジ}からの精密狙撃、それが彼らの最近の手法^{やうかた}だった。

彼の熱い一凶弾（想い）をその身に抱き、彼女は屋上^そから身を投げ出す。同時に自分の影を別方向へと飛ばす。飛ばされた影は忠実に彼女の姿を模倣し、それを視界の端に確認すると、自由落下の間に中断された行動を再開した。

すなわち、携帯ゲーム機の音をOFFにし、やりかけのステージの攻略を、…好きな時に好きなように、それが彼女の生き方^{スタイル}だ。

しかし、彼女にとつて不都合な事に時刻は、もうすぐ夜明けだった。

*

男は短く舌打ちした。奴らの感覚の外からの長距離狙撃の失敗、これで獲物に狩人の存在を感じかれてしまった。

「気は進まんが…」男は一つため息をつくとポケットから煙草をとり出し、それに火をつける。男にとつて幸いな事に、夜明はもうすぐだった。

微睡／黎明

夜の闇の中、その漆黒の中にあってさえ、自らの色彩を放つ自慢の黄金の髪を寝床に、彼女は物思いにふける。

いつまでこんな生活^{じよと}が続くのかと、…決まっている。自分が敵か、そのどちらかが消えるまでだ。

彼女の纏う黒い拘束着^{まと}は、その爪痕を示すようにあちこちが破れ、その身のいたる所には大小様々な傷が刻み込まれていた。奇妙な事に、その傷は全てが十字になるように執念深く刻みつけられていた。

明けに近づく夜空を見上げ、そして、けだるげに身体を動かすと、ポケットをまさぐり最近はやりの携帯ゲーム機を取り出す。そして自身の残りの時間をそれに費やすことにした。好きな時に好きなように、それが彼女の生き方だ。

世界は彼女に優しくは無かつた。

-黎明-

”人形師” 能登 源十郎の朝は早い。爺臭いだの貪^の乏^う性だのと言われるが、”人形師”として幼い頃より身についた習慣はそうそう抜けるものでもない。それに彼は この朝の静謐な雰囲気が嫌いではなかつた。

不意に、その静寂を破る奇妙な音がした。それは、どこか間が抜

けていながら、残酷な現実をつきつけるかのような電子音だった。

崩壊は一瞬、件の人物は、瓦礫の山とともに田の前に現れた。それは、黄金の髪をその身にまとった美女だった。

「ふむ、訪問はできれば玄関からにしてもらいたいものだな」呟き、子細にそれを眺めやる。漆黒の拘束着に身を包んだ黄金の髪の下では、エルフのように尖る耳が、その艶めかしい真紅の唇から覗く、人にしては発達しすぎた犬歯が、その存在が明確に人間とは違う事を自己主張していた。

身に纏う黒い拘束着のあちこちは破れ、そこから覗く白い肌には、そこかしこに裂傷^{キズ}が見受けられる。そして、その陶磁のような白い肌は、けして朝とは呼べない日の光の中で、熱を持ち初めているようだつた。

その一人の間に先ほどの間の抜けた電子音が響いた。それは、よく聞けばわりと聞き慣れた音だった。確かに、最近子供達の間で流行^{はやり}のゲームのGAME OVER音だったかな、と思つた時には、彼女が自身を見ていた。

その赤い瞳で、彼女は彼を捉えていた。目の前に見えるのはどこか凡庸な青年だった。長身瘦躯^男にしては長い髪の毛をうざつたそうに後ろで一括りにし、紺の作務衣^{さむえ}とか言つたか、日本独特の服を着て、その野暮つた丸眼鏡の奥にある瞳で、ただ真っ直ぐに彼女を見ていた。

『眠れ』^{じゅもん}一言を自身の邪眼にのせて言い放つ。それで事足りるはずだった。普通ならば、しかし、件の人物は、「…ふうむ」と、なれば氣怠げに呟くと、いかにもやる気なさげに彼女とともに崩落して

きた天井を見上げると、無造作に、何かを彼女の方に放り投げた。普段の彼女なら何なくその物体を受け止められただろうが、生憎それは今の彼女が受け止めるには重量がありすぎた。

『世界雑学辞典』と書かれた背表紙を弱つた力でからうじて受け止めた彼女の側で声が聞こえる。それはいかにもやる気がないといわんばかりの氣怠げな声で『言葉を返す』と、一言。それぎり彼女の意識は混迷^{やみ}の中に落ちていった。

彼はそれを眺めていた、子細に、舐めるように、朝の光の中でそれは異質な存在だった。黒の拘束着に身を包んだ金髪の美女、それだけでも異様なのに、その病的な白さを持つ肌は、朝の光の中で、熱を持ち始めていた。ほろほろとほろほろとその皮膚の表面が剥がれ落ちては再生を繰り返すその異常な光景に対し、

”人形師”能登 源十郎は、諦めたようなため息を一つ、黙つて、彼女に光を遮るための布を掛けてやった。

夜、とこう彼女の時間にこのよつたな氣分で田覚めたのは久々の経験だった。まず自身の身体の各部をチックし現状を把握する。悲しいかな、それは長い長い逃亡生活で身についた習性だった。

そして、とりあえず田的のモノを見つけると、すかさず、そのスイッチを入れた。聞き慣れた音楽を耳にすると彼女は作業を再開した、つまり、途中でゲームオーバーになつたステージを…

「…田覚めた途端にソレか」諦めたよつた声は、わりと近くから降つて來た。「いや～、だつてえ、田え覚めたら服は修繕して置いてあるしい、なぜか下着姿になつてるけど、なにかする気だつたらとつくにヤラれた後だらうしい、とりあえず優先順位的にゲームかな」と…」田覚めた金髪の美女はあつけらかんとしてそつと云つてのけた。

「と、言つわけであんたの血を頂戴な」氣づけば、彼女は素早く彼の背後に回りその首筋にかぶりつこうとしていた。「それでは、いただきまーす」明るく言い放つ彼女の耳に一言

「……屋根の修繕代、もしくは修理の手伝い」とかいうたつて平然とした日常会話が届く「いやいや、お兄さん、状況わかつてますかあ、もしもし?」さすがにコレは長くを生きた彼女でも想定外だったのか、どこか困惑したような雰囲気が醸し出される。

「アンタのせいで、今日は高校も休んだ。…恩知らずとは、この事だな、…やれやれ」とか、本当に面倒くせうに云つ彼に困惑しつも彼女は行動を再開しようとした。

『傀儡針』その一言が、彼女の身体を縫い止めた。そういえば、同じような展開が朝にもあつたなあとか、あれは朝という時間以外にも要因があつたのかと暢氣^{のたま}に考え始めた時にそれはやつて來た。

「たつ、だいまーですつ、マスターつ つて、な、な、な、なにやつてるんですかつ！？」弾むようなその声の主は、目の前のその光景に足を止めた。確かにソレはちよつと言い訳できないような光景だった。

下着姿の美女に絡みつかれている長身瘦躯の男、その彼女の身体は、獲物を逃がさない為に、その腕を首に、その長い足を男の太ももに、そうして身体全体で彼に絡みついていた。

「つうつ、源十郎様が悪の道ををつ…、お爺様の跡目を正式に継がれるのは嫌がられるのに、その遺産ともいいくべき技は惜しげもなくこのような事に使つてしまわれるのですね…」よよよとかどこから取り出したかわからぬ擬音つきで現れたのは、一言で表すならば、それは”少女”であった。

未だ発展途上な胸、曲線よりも直線が強調された身体つき、それが彼女だった。思わず彼女は、それと二人の間にある奇妙な空気を察して、つい、余計な一言を発してしまつた。

「……幼女愛好主義者！？」

「……頼むから、それは言わないでくれ」疲れ果てたようなため息を一つ、彼は一本の針で身体の自由を奪われた彼女の腕の中からスルリと抜け出す。そこに少女が彼女の代わりと言わんばかりに彼の首筋に絡みつくと彼女を思いつきり、それはもう遠慮も会釈も無しに睨み付けた。

少女を悪戯苦闘して引き剥がし、男は彼女に向き直ると、「神無、マスターはやめると再三、言つてあるだろ?」とやはつづ」が疲れようには抵抗していた。

男と少女のじゃれ合いが続く中、彼女は現われた少女を見ていた。その容姿を一言で現すとするならば、やはり”少女”、である。

それも美少女と言われて思い浮かべられる容姿の全てをかき集めその共通項を切り貼りしたよつた少女である。

しかし、そのためか、かえつて彼女の容姿そのものは平均化し、実際の彼女の容姿は美人の部類にからうじて入るといつぐらいでしかない。

ただ、その瞳にくるくると田まぐるしく浮かぶ感情が、彼女を見る人全てに可愛らしさと言つ形容詞を浮かばせるだらう。

そしてそれを更に強調してるのが腰まで届く長くつややかな黒髪を束ねた、これでもかといつぐらいにばかでかい真つ赤なりボンである。それは彼女が頭を動かすたびにびこびこと揺れてさながら耳のよつみである。

が、それさえもまた彼女に似合つからいかと思えるよつに彼女の一歩としておさまつていた。

「じゃ、御主人様」その猫のよつな瞳に悪戯っぽい光をたたえて少女が男に笑いかける。

どうやら、会話は神無と呼ばれた少女の勝利で終わりそうだった。

「仲良きことは睦まじきかな、で、良いンだけどサ、いいかげん私ハシチの方もなんとかしてくれるとありがたいンだけね」いい加減目の前の光景に耐えられなくなつて、彼女は相変わらず自由にならぬ身体で、無理矢理会話に割り込んだ。

「…で、どつちなんだ？」問う氣怠げな男の質問は、一瞬、何のことだかわからなかつた。さぞや疑問符を浮かべる自分は間の抜けた顔をしているだろう。そしてよつやくその意味に思い至る。

「…屋根の修理の手伝い、血液付きゴハンで」別に修理代くらい身につけている装飾品の一つを売ればお釣りがくると思つ、その為のモノだし、しかし、彼女はその選択をしなかつた。「…シリル＝アーシア、シリルでもシエリーでも好きなよつて言つて少女に对抗するように彼に片眼をつむつて見せる。

「”人形師” 能登 源十郎」答える声はやはり面倒くさげだった。「ええつ、源十郎様つ、そんな些事ハタチは良いから、彼女にはさつと出て行つてもらいましょ。ねねつ」「神無」今度は少女が、口ごもる番だつた。そして諦めたように「つづつ、マスターの意地悪う、そうやつて都合の良いときばかり権利行使するう…、ううつ、わかりました、わかりましたつ！－ そんな目で見ないでください、つて言つた、見つめ合つのはこんな時じゃなくて、もうちよつと他の時とかなら喜んで、とか言えるのにい、…神無です。三劍ミツルケ 神無です。シリルさん」いかにも不承不承と言つた呈の少女に彼女は苦笑した。そして彼女に感じる違和感と妙な圧力を自身の不調のせいと黙殺した。

意外な事に彼女の拘束はあっさり解かれ、あまつさえ、血液も提供された。保存物であつたし、いささか彼の血液に興味を覚えないではなかつたが、そこは自重した。彼女は確かに化け物と呼ばれるモノではあるが、彼女を追い回す敵のように卑怯者では無いのだ。

意外な事にシェリルと名乗つたバンパイアは、この生活に順応していた。しかし一向に出て行く気配が見えないのだ。件の彼女は予定の屋根の修繕が終わつても、しつかりとここに居座つていた。で、何をしているかと言うと、日がな一日、といつても彼女の活動時間の夜にだが、ひたすらにゲームというていたらくである。

その姿を見た彼女のマスターであるところの源十郎は特に不満を言つでもなく、一言「一度、拾つた野良猫の面倒見るのは道理だろ」いと委細構わないのだ。いや、確かに自身のマスターであるところの青年は、いささかというか、いろいろな物事を自分を含めてぞんざいに扱つ傾向はあるが、さすがにコレはチヨツト、行き過ぎだ。

何せ相手は素性のわからぬ吸血鬼、いや、素性が知れていれば良いといつものではないが…、必ず良からぬモノを連れてくるハズなのだ。この手の輩は、だから不慮の事故が起こる前に源十郎様を護るのが、従者たるモノの勤めである。

そう決心すると少女は、相変わらず田の前でパックの血液を下品にも音を立てて吸いながら、ゲームに熱中する彼女の前に立ちはだかると少女は言い放つた「勝負ですっ!!」と

*

「…なんと言つことだ」その光景を目の当たりにして男は呟いた。
それはあつてはならない光景だった。人と化け物がともに生活する
など、それは冒涜にも等しい光景だった。男はようやく見つけたソ
レを凝視すると、諦めにも似たため息を一つ、その場を後にした。

それは、平穏な時間の終わり、夜に生きるモノ達の時間が始まる
合図だった。そう、少女の予想通りにやっかい事は彼らのすぐ側に
やって来ていた。

「キヤー、ちょっと待つて、そこダメ、ダメつてばあ、いい、やあ～～」騒々しい声の主は少女のものだつた。少女の視線のその先では、画面の中で彼女の操る兎耳の格闘少女キヤラが窮地に立たされていた。

そこに「ほいっ、とな」と妙に嬉しそうな声がして、画面にYOH WIN!!の文字が誇らしげに躍る。

「……まだ、です、まだ決着は着いていません、まだ他に貴女に勝てるゲームがあるはずです」その少女の声には、疲労と負け犬の惨めさが滲み出でていた。

話は少し前に遡る。「勝負ですっ！！」と言い放つた少女に無造作に2P用のコントローラが投げ渡された。「え、ええっ！？」困惑する少女をよそに対戦が始まった。そして、「格闘ゲームもレースゲームもアタシの全戦全勝だけど、他に対戦できるのなんてあるのか？」といつも、連戦連敗したのがショックなのか少女は未だ俯き肩を震わせている。

「ううう、無い…です。…って言うかなんで貴女と仲良く対戦ゲームなんてやつて慣れ（じやれ）あつているんですか私はっ、そもそもその目的は源十郎様を誑かすつていうか、なんか騒動トラブルの原因となりそうな貴女を強制排除するハズだつたのに、おかしいですっ！！」とか言いつつも、連戦連敗したのがショックなのか少女は未だ俯き肩を震わせている。

対する彼女の方はと言えば、脱力した格好のまま「いや～、あんたが勝負ですか言つからてつきり、対戦かと…、それにこっちの方

が平和的だろ」と確信犯的な微笑みを浮かべていた。

それは、居心地の良いぬるま湯だった。かつては彼女もこの中に、それも当たり前のようにそれを享受していた。そして、あまりにもここは居心地が良すぎた。だから、あと一日あと一日と祈るように過ごすうちに、去るタイミングを逃してしまっていた。

その精算をするかのように、崩壊^{それ}は、いつも唐突にやつてくる。

それは、微かなサインだった。しかし彼女が気づくには十分すぎる呼び出しだった。いつもならそれに気づく前に逃げ出す。そうしなかったのは、彼女がいたからだった。彼女に関わった者達への彼らの仕打ちを知っていたからだった。

「… そうだな、確かにここは居心地が良すぎた、だけど、そろそろお別れの時間だな」言つて彼女は立ち上がる。現れた時と同様、唐突に、彼女は彼らの目の前から立ち去つた。

「… 行つたか」その場に特にどうと言つともなく青年は現れる。その手には、ひょこひょこと動く紙人形が乗つっていた。

「ええっと、まさかとは思いますが、首突つ込むとか、言いませんよね源十郎様?」

「ふむ、”人形師”としてはいささか場違いだが、な」

濃密な闇に紛れて、硬質な気配が周辺あたりを包んでいた。

「呼び出しに応じるとは珍しいこともあるものだな、ショリル」ビルの屋上で、彼女より一段高いところに居座り男は見下ろすようにして、そう言う。髪に白いものが混じり始めた壯年の男は、そこまで生き延びたという事実が男の実力を現していた。

「やれやれやつかいな男に引っかかったモンだ…」金の髪に手を入れ、頭を搔きつつそう言う。

「減らす口は相変わらずだな、では、始めるところか

「まあ、待てよ、私は争いなんて望んじやいないんだ、見逃してはくれないか?」たぶん諦めとほんの少しだけの期待を込めて彼女は男に言った。

「奇遇だな、私も争いなんて望んじやいない、求めるのは一方的な勝利だよ」銃声が響く、それは男の立ち位置とは別方向から来た。

「本当に君には感謝している。あのショリルを仕留めたとなれば、わたしの組織内での株も上がるというものだ」人外の化け物を前にして余裕の笑みを男は浮かべる。

「そりそり男の都合良いくじょうに女はできていないんだよ」言つて指の間にはさんだ小石を弾く、ただの石ではあるが彼女の怪力でそれを放てば、それは銃弾と変わりが無い。

しかし男に命中するはずの弾丸は、彼をすり抜けた。「無駄だよ、

人間は進化しているんだ。科学の力という奴だ。人より多少能力が優れているだけで、君たちは欠点だらけなんだよ、大人しく、彼らのモノになりたまえ」

その声に答えるように、彼女の周りに人の囮いが作られる。

「現地協力者、稀少生物保存団体の皆さんだ。嫌がらずに踊つてあげてくれたまえ、なにせこの極東の国は、我ら”存在しない教会”の力が及ばなくてね、困ったもんだ」

「では、捕獲を開始する」紹介された団体様は黙々と作業を開始した。

「ああ、世界に存在する存在しないはずの生物を保存するという中々にふざけた組織だが、舐めない方が良いぞ、シェリル」「忠告痛み入る。が、自身の手柄は良いのか」問う彼女に男は含みのある笑いで答えた。

「やれやれ、お前達の組織の者達より使えるんじゃないのか彼らは」言つ彼女の拘束着は破れ、肌のあちこちから出血していた。

「いやいや、お前の肌に同胞達が刻み込んだ呪法のおかげさ、しかし私もまさかここまでとは思わなかつたよ、恐るべし極東の国ジャパンだな」言つて捕獲用の網の中に捕らわれた彼女に愛用の拳銃を向ける。

「ふん、捕獲した十と六匹の生態部品を使つた捕縛用の術式に近代兵器をえたものだ、たかだか吸血鬼ごとに遅れをとるわけがない」不機嫌そうにその組織の禿頭が答える。

「それは、失敬、では、シェリル、覚悟したまえ」銃声が響き、彼女の不死性を奪うはずのその聖別された（ぎんの）弾丸は彼女に届かなかつた。

「やれやれ、会つた時以上にボロボロだな」その青年は、いかにも面倒くさげに、彼女をその腕の中に抱えて言つた。

「いやいや、アタシもまさかこの年齢ナイジになつてお姫様ダッコされるとは思つていなかつた」その腕の中からするりと抜け出て自身の足で立つと彼女は彼をかばうようにして立つ。「不覚にも、ちょっとと感動しちやつたかな、ありがとうよ。でも、あとは大人の時間だよ、坊や、痴話喧嘩に他人がとやかく口出すものじゃないだろ」

「邪魔だてするなら、容赦はせんぞ、小僧」男は自身の見せ場を奪つた青年を見て言つ。しかし、青年は搖るがなかつた。

「拾つた野良猫が自分の知らないところで死んで、翌朝その死体を見つける。そういうのは、好きじゃないんだ」真っ直ぐに男を見返し青年はため息をつくかのようにそう言つた。

「ならば、容赦はない」声と放たれた弾丸に容赦も躊躇もなかつた。しかし、弾丸は彼らにかすりもしなかつた。

それは、奇妙な光景だつた。彼らの目の前、シェリルが、その銃弾になんらかの対処をしようとした。その目の前で、銃弾が受け止められていた。小さな人形に、大きさにして約三十センチ弱の玩具の人形が構えるシンバルに受け止められていた。

「なつ！？」驚愕は至極当然のものであつただろう。常に彼らの戦場にある者達にとつてさえ、それは不条理な喜劇じみた光景だつた。

「玩具の楽隊」ぼそりと呟くように言つた彼の目の前に、玩具の楽隊が整列する。冗談のようにそれぞれの楽器を構え彼らを護るよう立ちはだかる。

「準備おつけです。源十郎様、つて、ちょっとくつきすぎですよシェリルっ！」その背後からやたらと彼女には不釣り合いな行李を背負つた少女が姿を現す。

「いやいや、会つた時からただ者じやあないとは思つていただけど、改めて自己紹介とかはしてくれるとお姉さんは嬉しいかな」

「”人形師”源十郎」さらに彼女を護るように再度身体を入れ替え、ぼそりと男は呟いた。

「同じく、形無しの神無、参ります、つてさつさと源十郎様から離

れなさい、シェリルっ！！」変わらず少女の緊張感の無い声が響く。「えへ、か弱い乙女としては、ちょっと護つてもらつヒロインとかいう役どころにあこがれちゃつたりとか～」

「随分と余裕だが、たかが人形師風情、我らの敵ではない」未だ数の上で優位が覆らない者達が言う。

「では、その人形師風情の実力、味わつてもらおうか、演奏開始」ぼそりと呟かれた声に応じて、玩具の楽隊は目の前の敵目がけて殺到した。それは、喜劇じみた光景だった。大の大人達が、あるものはシンバルを抱えた猿に打ちのめされ、フルートを構える兎に追い回される。

しかし、追い回される當人達にとつては、ソレは笑い事ではすまされない。人間よりも小さいのが、自分達以上のスピードを持って動き回るのだ。そして、散逸的に行われる反撃の全てをその玩具達は、余裕を持つてかわすのだ。いくら喜劇的に見えようと、それは當人達にとつて悪夢には違ひなかつた。そして予定通り、彼らは追い立てられていった。

「やれやれ、なんとかなつたか」呟く彼を横合いからの強い力が突き飛ばし、件の人物は頭を押さえつつ「あ、うう、痛いです」とか言いつつ立ち上がつた。

「やれやれ、貴様も人外か？」つくづくこの国は人を馬鹿にしてくれるな」言つて消炎たなびく回転式拳銃リボルバを手に、先ほど今まで事態の傍観をしていた男が立ち上がる。

「貴様、それをしてしまつたら、狩人ではなく、ただの人殺しだぞ」視線が交錯し、男はその場に背を向けた。「それでは、今宵はお暇

「あらとじよひつか」

「容認する事でも?」

「するせ、なにせ貴様は心優しき吸血鬼だからな、背を向ける相手に牙を向けることはないだらう、や」

「…」

「それに、あこづらのよつた喜劇を演じる氣はない。見かけはばかばかしいが、実によく出来た兵器だよ、あれは、…今は機を見誤つた。次に会うときはもつともつと君達のことによく調べてからだよ、源十郎君」言って男は立ち去つた。

月明かりの中で

「いや～、お姉さん、感激、命の危機に陥るヒロイン、ソレを口の危険も顧みず飛び込む勇者」

「それは良いが、いいかげん離れてくれると嬉しいんだが」彼の耳元で快哉を叫ぶ美女に面倒くさげな視線を向ける。と、名残惜しげに彼の元を離れる。と、それを待っていたかのように彼の元に少女が勢いよく飛び込む。

「源十郎様、玩具の楽隊、回収終了です。予定通り彼らの記憶消去ならびに背景組織の詳細も調べ終わりましたから本家から圧力かけてもらつちゃいましょう」言つ少女はとても生き生きとしていた。

「やれやれ、あまり気は進まんが…」

「何言つてるんですか源十郎様、使えるものは使いましょ、ただでさえ分家の小倅とか言つて無理難題押しつけられてるんですから、これくらい当然の権利です。つて何するんですか、シェリル？」言つて振り返る少女のその腕にはシェリルの長い爪が食い込んでいた。

「いやいや、これでも不意をついたつもりなんだけど、これ位じゃダメか」悪びれもせずに金髪の美女は少女から距離を取る。

「どうこう、つもりですか？」憤懣やるかたもないと言つた風で少女は呟く。

「いやいや、簡単な事さ、源十郎、お前が欲しい。お前を私のものにしたい。よつて神無アンタが邪魔」

「ちよつと待つて下れ、貴女の目は節穴ですか、この年中やる気なさ氣な源十郎様のどこをどう見て、そんなセリフを吐くんですか

つ！ 源十郎様の良さをわかるのは私一人で十分なんですっ――！」

「いや～、あたしは別に一番田とかでも良いんだけどねえ、どうみてもアンタが邪魔しそうだから、とりあえず排除、みたいな～」

「当たり前ですっ―― もうっ、頭来た。助けてもらつた恩も忘れて、私の源十郎様に手を出そつなんて、許しませんっ――！」

「それにね、源十郎、お前は思い出させてしまつた。独りは寂しい。独りはつらい。独りは悲しい。せつかく忘れていたのにねえ、思いだしちやつたから、わたしは、それを思い出させた。お前が欲しいそれは真摯な祈りのように彼に届いた。

「やれやれ、拾つた野良猫が懐かないのはよくある話だ

「そういう問題ですかっ！？」

「じゃあ、ルールの説明、私が攻撃側、源十郎の首を一咬み、同族にすれば私の勝ち、神無が守備側、夜明けまで持ちこたえれば、アンタの勝ち」一方的に説明が終わり、彼女が肉薄する。

「つて、明らかにアンタに有利でしじうが、それになんでもう怪我とか治つてんのよ」

「さつき、源十郎が補充血液くれた」

「だあーつ、もうつ、源十郎様つ

「悪いが、神無の味方をさせてもらつぞ、朔夜

「いやいや、吸血鬼になつてともに不老不死の道を歩もう、ん、退屈はさせないよ」

「悪いが、間に合つてているんでな」言つて、少女の運んできた行李を開く、そこには一体の日本人形が收められていた。その肌は白く、纏う着物の衣装の刺繡は黒地に金糸で現された銀河と月、たおやか

なるその肢体の手を取ると少女はその中に消えた。

「んんっ、どうこう不思議！？」

「形無しの神無、あらゆる人形の性能を引き出すために作られた生き人形だ、彼女は」

「さすが、不思議の国ジャパン」それは認知出来ないスピードのハズだった。人智を超えたスピードというものは、それだけで武器たり得る。事実、認識できない攻撃というものに彼女たちさえ苦戦しているのだ。なのにそのほつそりとした腕に彼女の爪は阻まれていた。「女子が乱暴をするものではありません」凛としたその声は、説明が事実ならあの少女のもののはずだった。

「…！？ なんか自覚のないことのたまわってますけど、彼女！？」

「まあ、溶け込んだ先の人形に込められた想いに引きずられるというのだが、多少、難点ではあるかな」ため息をつきつつ彼はそれに答えてやつた。

次は慎重に、自身の身体を左右に揺らし、フェイントを幾種も交え、その背後から襲う。源十郎自身が朔夜せくやという人形を抱くようにしているので、彼自身にその牙を届かせるためにはまず朔夜これをなんとかしなくてはいけなかった。

「いやいや、ちょっと待て、なんでコレが止められるんだ」言う彼女は笑っていた期待以上だというのに

「ふむ、別に読んでいるんでは無く、誘導ようしゅうしているんだよ朔夜せくやがな、この者の前で力満ちる者は無く、故に朔夜せくやの銘が付く」「おわかりですか、素直に降伏された方がよろしいかと」

「いやいや、ゲームはここからが楽しいんだよ、見ていれば、なぜそこはそこから一步も動かない。それに何故、受け止めるだけで、

攻撃して来ない？ たぶん出来ないんだろ朔夜は、というわけで攻略法みーつけ

「どうしましょう、源十郎様、ばれてしましましたわたくしがただの盾でしかないことが…」その典雅な顔を落胆に染め朔夜がおずおずと口くちが主に告げる。

「じゃあ行つゝよ、千輪」彼女の周りをいくつもの玉せんりんが周遊する。「この軌道は無作為ランダムだから…」言いかけてそこで何かに気づいたように問う「…やっぱ源十郎って、生身だよねえ、…ええと、まあ死なないようガンバって、うん、死ななければ私が何とかできるから」と氣まずそうに呟いた。

そして、浮かぶ千輪が、殺到する。それは、シェリルの方にも向かうが彼女はソレを難なくかわす。

「源十郎様つ！」悲鳴じみた声は、あまりの数の多さに対応しきれなくなつた朔夜のものだった。

「やれやれ、だから人形師これがいる。人形を生かすも殺すも人形師次第と、いうわけだな」氣怠そうに呟いて、彼は朔夜の中に手を入れる。

それは、先ほどまでの彼女とは違つた。彼の操る朔夜は、一層の輝きを増し、迫り来る攻撃をものともせずにシェリルに詰め寄る。そして、あくまで艶やかに、彼女に申し渡す「詰み、でござります」

「はいはい、降参一一さん、こーさん、あたしの負け~」どこか子供じみたその様相に、場が和みかけたとき、不意に彼女が動いた。それは攻撃の意志とはまったく異なる動きだった為、あまりに無造作な動きだった為に彼らの対応が遅れた。

そして彼はソレを反射的に嚥下してしまっていた。「…なにを為さいました、貴女」問う美貌は冷たく夜に映えていた。

「えーと、私の血を飲ませた。これで契約は成立だぞ、源十郎。今日からお前が私の仕える主だ」

「どういう事が、ご説明願えますか、シェリル」

「もちろん、つまり予定通りという事だよ、吸血鬼の序列つてやつ、噛まれた奴は噛んだ奴に絶対服従つて強制力、まあ要するにだ。吸血鬼同士の婚姻の儀式みたいな感じ、あとは私が源十郎咬んで吸血鬼にすれば、対等な吸血鬼のいつちよあがりと言つわけ、いやいや大変なんだわコレ、手順が色々あつてさ」

「やれやれ、ようするに、だ。すべてはお前の思惑道理というわけか?」疲れたようなため息とともに男が呟いた。

「お前が悪いんだぞ、源十郎、お前が思い出させたんだ、独りは寂しい、独りはつらい、独りはこんなにも寒いんだ。だから、お前と共にいたい、その理由が欲しかったのさ、もちろん、拾つた猫を途中で見捨てるような事はしないよな、源十郎」いたずらつぼく笑う彼女に、どこか諦めたような男のため息が聞こえた。

そうして日常が戻ってきた。あいもかわらずシェリルは居座りひたすらとゲームをやり込んでいるし、源十郎は源十郎で相変わらず日々を氣急げに過ごしていた。

そして今夜もまた件の人物を天井裏で発見した。「何をしているんですか？ シエリル？」それに半眼で少女が問いかける。

「ええと、夜這い？」件の人物は悪びれる風も無くそう言い放つた。
「また、ですか？」「ええと、また、ですねえ」無邪気に笑いながら彼女はそう、言った。

その首根っこをひつつかむと少女はシェリルをずるずると彼女の寝床とは名ばかりの棺桶に引っ張つて行こうとする。別に棺桶である必要性は無いらしいのだが、彼女の言つところの様式美であるらしかつた。

「ううん、^{夜這い}の時の方が可愛かつたぞ、お前」それは、何の気もない一言だったかもしれない、しかしその一言は少女にとつて爆弾だつた。思い当たる節もあるのか、少女は暗い背景を背負つてうなだれていた、よく聞けば「いいんです、いいんです、男の人つてみんなああいう譲つてあげたくなるような、それでいて大人の身体の女性の方が好みなんです」とかいう陰鬱な声が聞こえる。

その隙に、再度中断された夜這いを再開しようとして、やはりその首根っこを先ほどよりも力強く押さえられる。

「ところで、思つんだが、源十郎を吸血鬼にすると、ずっと一緒にいられるぞ、生き人形の神無ちゃん」確信犯的な笑みを浮かべて彼女は再度言い放つ。

「うう！？」恨めしげな少女の視線と彼女の視線が交錯し、何かを振り切るように少女は彼女を引きずつて行こうとして、その違和感に気づき振り向くと「丸太！？」って、変わり身の術とか、何を日本かぶれしてんですか、あの吸血鬼はっ」叫ぶと、源十郎の寝室の扉を開く、そこでは今までに、源十郎の首筋に噛み付こうとしているシェリルが

「はいはい、痛いのは最初だけ、優しくするから」とか言つていた。

「玩具の楽隊、演奏開始」「いやー、やめてー」とか叫ぶ彼女はどうみてもこの状況を楽しんでいた。「やめなさい、シェリルっ！源十郎様は私のなのっ！！」

彼女たちに挟まれた中で、”人形師” 能登 源十郎は深々とため息をついた。どうやら彼の安らかなる睡眠はだいぶ遠のいてしまつたようだった。

余（後書き）

続きが読みたいといつ奇特性な方がいらっしゃれば続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9302b/>

狂夜余話 - 人形師 源十郎 -

2010年10月12日13時26分発行